

## 研究発表の授業における認知プロセスの外化 —上級のアクティブラーニングを考える—

発表者：黒崎亜美・黒崎誠（ラボ日本語教育研修所）

### 1. はじめに

昨年に引き続きアクティブラーニングを取り入れた授業実践を報告する。前回は初級レベルであったが、今回はその活動を経て上級になった学習者を対象とした実践報告である。

日本語教育は、授業の中でグループ活動やピア活動を積極的に行ってきました。そのため、アクティブラーニングを取り入れやすい。しかし、だからこそ従来の活動との違いはどこにあるのかという観点で、アクティブラーニングについての正しい認識を得る必要がある。今回は、「認知プロセスの外化」をキーワードに報告する。

### 2. 先行研究

「予測困難な時代にあって生涯学び続け、主体的に考える力を持った人材は、受動的な学修経験では育成できない」（中央教育審議会大学分科会大学教育部会 2012）として、大学教育においてアクティブラーニング（能動的学修）が注目されている。同様に、「主体的に考える力を持った人材」の育成が重要課題の一つである日本語学校教育においても、アクティブラーニングは注目に値する。

溝上（2015）は、アクティブラーニングを「一方向的な知識伝達型の講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く、話す、発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う」と定義している。松下（2015）はこれを受け、「認知プロセスの外化」を学習活動の中に正当に位置づけたことがアクティブラーニングの功績であると述べている。ここでいう「認知プロセスの外化」とは、物事を認知する過程で自らが認識したことを他者に話したり、書いたり、発表したりすることでより深く、正確に認知することを指している。

### 3. 実践報告

#### 3.1. 授業実践

「研究発表」は、当校では2008年から、上級の修了の学期（1月～3月期）に行なってきたものである。学習者は、検索の方法、ネット上の文章を引用する方法等を学習した後、自分が興味があることをテーマとし、5週間で研究発表できるように準備をする。今回は、アクティブラーニングを初級で経験した学習者を含むメンバーであり、他者のとの対話を通して準備を進める形で、コンピテンシー育

表1 「研究発表」授業の流れ

	授業内容	評価
第1回	ネットの情報検索の方法	
第2回	検索した文章の利用方法	★評価対象
第3回	テーマを決める	
第4回	アウトラインを決める	
第5回	中間発表	★評価対象
第6回	準備 ①	
第7回	準備 ②	
第8回	準備 ③	
研究発表大会		★評価対象

成の観点から研究発表の授業を再構成した。

### 3.2.1. 授業の概要

今回ここで取り上げる活動は2018年冬学期（1～3月）に行なった。実施したクラスは上級後期（学習時間1200時間以上）である。学習者は11人（ベトナム人男性2人・女性2人、中国人男性1人・女性4人、韓国人女性2人）で、うち、中国人男性1人、中国人2人は、初級段階でアクティブラーニングの活動を経験した学習者である。なお、授業時間全8回（1回につき約90分）で準備をし、研究発表大会を実施した（表1）。

学習者に明示した目標は、従来の研究発表の授業と同様の「必要な情報を効率的に検索できるようになる」「収集したデータを自分の言葉でまとめることができる」「発表を効率的にサポートする視覚資料が作成できる」に、「学生同士のインターアクションがスムーズにできるようになる」「自分の言語行動を振り返ることができる」という二つをプラスした。

学習者への課題設定は、「①自分が持っている知識、②調べた知識・確実なデータ、③印象・感想（自分・他者）、④特徴分析が含まれたプレゼンテーションを行う」を明示した。

### 3.2.2. 「研究発表」の評価

第2回「検索した文章の利用方法」で調べた内容をまとめたものを「書く」の評価、中間発表で自分の研究発表のテーマ、流れ、今後の作業予定などを他の学習者に発表した内容を「話す」の評価とした。最終的に研究発表大会の発表内容をテスト対象とし、従来の「研究発表」「スピーチ」の授業で使用していた評価表をそのまま使用した。研究発表大会では、1)話題、2)内容、3)構成、4)ジェスチャー、5)視覚資料、6)質疑応答を評価した。

### 3.2.3. 「他者との対話」の取り組み

上記の評価とは別に「他者との対話」に重点をおき、第3回以降第8回まで「教師との対話」で教師との話し合いを持った。また、「自己との対話」で学習者は、振り返りシートを用いて自らの言語行動を文字化した。さらに、中間発表と研究発表大会では、学習者が他の学習者を評価したり意見交換したりする機会を設けた。これにより、「教師との対話」「自己との対話」「学習者同士の対話」の3つが授業の中に組み込まれた。

## 4. 授業の考察

### 4.1. アクティブラーニング活動経験者の観察

アクティブラーニングの活動を行なったことで、研究発表が従来のものより素晴らしいものになったとは言えない。人数も少なく、有意差も発生しない。個人差の域を出ないだろう。経験者と未経験者での差も、人数が少ない上、個々での取り組みを重視した授業であることから、比較することは無意味だと考える。しかし、アクティブラーニング活動経験者が今までの学習者と最も大きく違った点は、授業内で人の話を聞く姿勢ができていることだった。他の学習者の研究発表を聞くだけではなく、他の学習者と教師が話している内容にも興味を持ち、それを自分の研究発表の準備に活かそうとする姿勢が見られた。

### 4.2. 「教師との対話」について

第6～8回の授業は「準備」であり、学習者が個々の研究発表のための準備を、各自のペースで進める。そのため、授業の最後に学習者と教師との面談の時間を設けた。教師は

「今日は何ができたか」「これから何をしなければいけないのか」「どんなことを研究発表の中に入れたいのか」を、学習者自身の言葉で言語化するように質問していく。この際に学習者が準備したものを見るが、ここでは添削はしない。求められればアドバイスはする。

学習者は、始めは教師から教えてもらおうとするが、徐々に、「報告+相談」というスタイルに変わっていく。また、ここでの内容を、振り返りシートに反映する学習者が多かった。この教師との面談は、準備をしている同じ教室の隅で行なっていたが、他の学習者もその様子を聞いており、途中で助け舟を出す、アドバイスをする、自分が持っている情報を提供するなどの、協働姿勢が多くみられた。

教師との対話 内容例（教師のメモより） 学習者A（ベトナム人女性）：準備①

今日は何ができたか ●資料を集めた●ベトナム語のカタカナでの書き方を考えた●中間発表のアウトラインと変えた（最後の部分） これから何をしなければいけないのか ●新しいアオザイの資料（写真とか動画とか） ●自国の歴史の説明をどこまですればいいのか どんなことを研究発表の中に入れたいのか ●歴史の最後を、現在のものにする（ミスユニバースの民族衣装） ●特別な時に着るものではなく生活に密着したものであることを強調したい（日本の着物と少し違う）

教師との対話 内容例（教師のメモより） 学習者B（韓国人女性）：準備②

今日は何ができたか ●ネットで検索し、必要な資料を集めた●自分の体験についてまとめる これから何をしなければいけないのか ●説明（定義のこと？） ●問題点（反対意見についても触れる） どんなことを研究発表の中に入れたいのか ●賛成するだけではない発表にしたい（問題提起？） ●日本人はミニマリズムをどう考えるのか？

#### 4.3. 「振り返りシート」について

第6～8回の授業の最後に、学習者は「振り返りシート」を書き込み、提出する。振り返りシートは記述式で、「今日できしたこと」「今後調査・記述が必要なこと」「どんな研究発表にしたいと考えるか」を文章でもいいし、箇条書きでもいいので言語化するものである。

聞いている内容は、前節の教師との面談で聞いている内容と同じである。比較すると、話していた内容を文字化している学習者もいるが、話していた内容と書いている内容が違う場合もある。また、話した内容よりも詳しくなっていた学習者も多かった。これは話をしたあとに書くものなので、追加したり、また話す時にはどのように表現したらよいかがわからず、振り返りシートに書いたものもいる（後日、インタビューで確認）。

振り返りシート 内容例 学習者A（ベトナム人女性）：準備①

今日できしたこと ●資料（写真） ●ベトナム語のカタカナ ●話すの順番が変えた 今後調査・記述が必要なこと ●最近のアオザイの資料（写真とか動画とかがありますよ） ●歴史のことばが難しい（おもしろくないからみじかいほうがいい） どんな研究発表にしたいか ●特別じゃなく身近をいいたい（高校の制服とか） ●ミスユニバースのアオザイの話

振り返りシート 内容例 学習者B（韓国人女性）：準備②

今日できしたこと ●必要なことを集めた ●自分の体験 ●レジュメを少し書いた 今後調査・記述が必要なこと ●「よくない」という人の考えを調べる（友達の意見・家族の意見） どんな

研究発表にしたいか ●日本人はミニマリズムをどう思っているか聞きたい ●私の生活の中でミニマリズムにしないのはなぜか説明したい（家族の話を少しする） ●日本でミニマリズムが広くなったのはいつごろなのか説明したい

#### 4.4. 研究発表大会について

学期のテストという位置づけで、研究発表大会を行なった。当日の参加者は9人で、タイトルは表2に提示した。発表後に教師との質疑応答を行ったが、自然な形で聴衆である学習者からも質問が出て、活発なディスカッションが行われた。

評価は前述の評価表で行った。それとは別に、学習者が他の学習者の発表を聞いて、「1) 内容について、2) 形式について、3) 視覚資料について」の3項目の評価と、記述式でコメントを書くことを行なった。

#### 4.5. 授業を終えて

アクティブラーニングは学習者の学び方に焦点を置いた考え方で、新しい教授法ではない。しかし、学習者にどのような授業を提供するのか、その組み立て、さらに学習者にどのように働きかけるのかが大きな意味を持つ。学習者に積極的な学びの姿勢を求める同時に、担当教師には従来の授業形態にとらわれない柔軟な対応が求められる。梅田(2005)は、従来の「伝達・指導型教育」から「参加・対話型教育」へと転換する中で、教師の役割も大きく変わると述べている。教師の役割は、「教授者」から「情報提供者」「共同学習者」「メンター」へと変わる。この意識の改革が求められるだろう。

#### 5. まとめ・今後の課題

アクティブラーニングを取り入れることで学習者の学び方が変化した。教師からのアドバイスを待ってそれを取り入れるだけでなく、積極的に他者と係って自身の課題を見出す姿勢が見られるようになった。この変化をどのように評価するかを今後の課題としたい。

#### 参考文献

- 梅田康子 (2005) 「学習者の自立性を重視した日本語教育コースにおける教師の役割」『言語と文化：愛知大学語学教育研究室紀要』12号, 59-77
- 黒崎亜美・黒崎誠 (2017) 「『アクティブラーニング』の考え方をとりれた授業実践の試み」平成29年度日本語学校教育研究大会予稿集, 22-25
- 中央教育審議会大学分科会大学教育部会 (2012) 「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ（審議まとめ）」
- 松下佳代 (2015) 「ディープ・アクティブラーニングへの誘い」 松下佳代 (編著)『ディープ・アクティブラーニング』, pp1-27, 勤草書房
- 溝上慎一 (2015) 「アクティブラーニング論から見たディープ・アクティブラーニング」 松下佳代 (編著)『ディープ・アクティブラーニング』, pp31-51, 勤草書房

表2 「研究発表大会」内容

	テーマ	国籍	視覚資料
1	口紅について	中国人女性	PPT
2	ベトナム女児殺人事件 その後	ベトナム人男性	PPT
3	日本の鉄道 車窓の魅力	中国人女性	PPT
4	バインチエンについて	ベトナム人女性	レジュメ
5	ミニマリズムについて	韓国人女性	レジュメ
6	シルクロード 歴史とその魅力	中国人女性	PPT
7	アオザイの歴史について	ベトナム人女性	PPT
8	電子マナーのこれからについて	中国人男性	PPT
9	一蘭の魅力について	ベトナム人男性	レジュメ